

# 1 歳 6 か月児を持つ母親の育児仲間の実態と 育児仲間の有無に関連する要因

宮野 幸子, 石渡 丈子<sup>1)</sup>, 表 志津子<sup>2)</sup>, 岡本 理恵<sup>2)</sup>, 中田 (市森) 明恵<sup>2)</sup>  
高橋 裕太郎<sup>3)</sup>, 山田 裕子<sup>4)</sup>

## 要 旨

**目的:** 1 歳 6 か月児を持つ母親の育児仲間の実態と育児仲間の有無に関連する要因を明らかにすることである。

**対象と方法:** A 県 B 市の 1 歳 6 か月児健康診査を受診した母親を対象として、無記名自記式質問紙調査を行った。調査項目は基本属性、育児の状況、育児ストレス、対人態度 (内的作業モデル)、育児仲間の有無とし、育児仲間の有無に関連する要因をロジスティック回帰分析した。

**結果:** 分析対象者 105 名のうち、育児仲間がいない者 (なし群) は 10 名 (9.6%)、なし群の平均年齢は 33.4 歳、子どもの出生順位は第一子 70.0%、育児仲間が必要であると回答した者は 80.0%であった。育児仲間に最も期待することは手段的サポート (情報交換・子どもを預け合う等) と回答した者は、育児仲間なし群は 60.0%で、あり群の 20.0%より有意に高かった ( $p < 0.01$ )。育児ストレス尺度得点の合計は、育児仲間なし群が有意に高く ( $p < 0.01$ )、内的作業モデル (安定型) の得点は、育児仲間なし群が有意に低かった ( $p < 0.05$ )。育児仲間の有無に関連する要因は、育児仲間に最も期待すること (手段的サポート/情緒的サポート) ( $P = 0.015$ , オッズ比 5.443)、内的作業モデル (安定型) ( $P = 0.007$ , オッズ比 0.831) であった。

**考察・結論:** 1 歳 6 か月児は歩行が確立し外出の機会が増え育児仲間と出会う機会も増えることが予想されるが、育児仲間がいない者が約 1 割存在し、それらは育児仲間に手段的サポート (情報交換・子どもを預け合う等) を期待しつつも他者との関係に苦手意識があることから、母親同士の交流が促進される育児仲間づくりの支援が必要である。

## KEY WORDS

parenting acquaintances, mothers with 18-month-old children, child-rearing stress, interpersonal behaviors

## 緒 言

現代の子育て環境は、少子化、核家族化、家庭での子育て機能の低下や対人関係の希薄化などから育児の孤立を招き、母親の孤独感や育児ストレスなどの増大が懸念されている。とりわけ 3 歳未満の子どもを持つ女性の 8 割は家庭で育児をしており<sup>1)</sup>、社会からの孤立感や疎外感を持つ者も少なくない。

厚生労働省は、家庭や地域における子育て機能の低下や子育て中の親の孤独感、不安感の増大に対応するため、平成 14 年度につどいの広場事業<sup>2)</sup>を創設し、

子育て当事者による子育て親子の交流やつどいの広場の提供を行っている。平成 19 年度からは地域子育て支援拠点事業<sup>3)</sup>を創設し、子育て支援センターにおいて、子育て親子の交流の場の提供と交流が推進されている<sup>4)</sup>。さらに、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援を提供する体制を構築することを目的とし、平成 29 年には子育て支援包括支援センター<sup>5)</sup>の設置が新たに規定されている。

ソーシャルネットワークと母親の孤独感について、3～4 か月児を持つ母親では、「ママ友達」がいない

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

1) 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

2) 金沢大学医薬保健研究域保健学系

3) 津幡町役場

4) 名古屋女子大学健康科学部看護学科

者ほど孤独感得点が高く<sup>6)</sup>、4 か月児を持つ母親と1歳6 か月児を持つ母親においても、育児仲間と母親の孤独感は関連があることが報告されている<sup>7)</sup>。また、乳幼児を持つ母親は、子どもの年齢が近い母親と育児の状況や悩みを共有したり、相談し合ったりしたいと考え、そのことが育児の充実と心の安定につながる<sup>8)</sup>と考えている。このことから、育児仲間づくりの支援は重要であると考えられる。

育児仲間の有無に関連する要因について、3 か月児を持つ母親を対象に調査した研究<sup>9)</sup>はあるが、1歳6 か月児を持つ母親の育児仲間の実態と育児仲間の有無に関連する要因を調査した研究はない。1歳6 か月児は歩行が確立するため親子で外出する機会が増え、母親同士の出会いから育児仲間へと関係が発展する機会も増えることが予想される時期である。そこで、本研究では、育児仲間づくりの支援を行うための示唆を得ることを目的に、1歳6 か月児を持つ母親の育児仲間の有無とそれに関連する要因について検討した。

## 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究では、育児仲間とは、中山<sup>10)</sup>の定義を参考にして「子どもを介した母親同士の関係で、育児に関する感情や経験を共感できる友人」とした。出会った時期や関係の度合いは問わないものとした。

### 2. 対象

A県B市の1歳6 か月児健康診査を受診した母親391名のうち、同意が得られた129名とした。

### 3. 方法

#### 1) 調査方法

1歳6 か月児健康診査会場で、調査協力に承諾の得られた者へ無記名自記式質問紙を配布し、記入後返信用封筒に入れ郵送するよう依頼した。ただし、対象者が健康診査会場での回答を希望しその場で記入した場合は、質問紙を直接受け取った。調査期間は、2016年8月から2016年10月であった。

#### 2) 調査項目

##### (1) 基本属性

母親の属性は、年齢、就労の有無、育児休業取得の有無、退職理由、家族形態、居住時期、経済状況とした。

子どもの属性は、性別、出生順位、保育所等の入所の有無とした。

##### (2) 育児の相談相手と育児仲間に対する考え方

育児の相談相手の有無、育児の相談相手のサポート満足度、育児仲間の有無、育児仲間の必要の有無、

育児仲間に最も期待すること、育児仲間づくりのために最もできそうなこととした。

さらに、育児仲間ありの者に対しては、最も交流のある育児仲間と出会ったきっかけ、最も交流のある育児仲間との交流方法・交流頻度・関係の満足度とした。

### (3) 育児ストレス尺度短縮版 ((Parenting Stress Index Short Form : PSI-SF)<sup>11)</sup>

本尺度は、奈良間ら<sup>12)</sup>が、米国において育児ストレスを測定するために開発された Parenting Stress Index(PSI)の日本語版を作成し、日本の乳幼児の母親を対象にその信頼性と妥当性を検討し、内的整合性と安定性が確立されている。子どもの特徴に関するストレスについての9項目と、親自身に関するストレスについての10項目の全19項目から構成される。各項目は1. まったく違うから、5. まったくそのとおりの5件法で測定し、総点が高いほど育児ストレスが高いことを示す。

### (4) 対人態度

対人態度は内的作業モデル尺度<sup>13)</sup>を用いた。本尺度は、自己と他者の関係性の認識に基づく対人態度を測定するもので、安定型6項目、アンビバレント型6項目、回避型6項目の全18項目から構成される。各項目は1. 全くあてはまらないから、6. 非常にあてはまるの6件法で測定し、各型の合計得点が高いほどその型の特性が強いことを示す。本尺度の信頼性<sup>13)</sup>と妥当性<sup>14) 15) 16)</sup>は確認されている。

### 4. 分析方法

育児仲間の有無別に、母親の年齢、育児ストレス尺度得点、内的作業モデルの下位尺度を、対応のないt検定を用いて比較した。育児仲間の有無と、就労の有無、育児休業取得の有無、家族形態、居住時期、経済状況、子どもの性別・出生順位・保育所等の入所の有無、育児の相談相手の有無、育児の相談相手の有無、育児の相談相手のサポート満足度、育児仲間の必要の有無、育児仲間に最も期待すること、育児仲間づくりのために最もできそうなことを、Fisherの直接確率法を用いて分析した。

育児仲間の有無を従属変数とし、単変量解析で統計的に有意差がみられた変数の変数間との相関を確認した後に独立変数とし、二項ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法)を行った。適合度はHosmer-Lemeshow検定を行い確認した。解析にはSPSS ver.22を使用し、有意水準は5%とした。

### 5. 倫理的配慮

本研究は、所属機関の医学倫理審査委員会の承認(承

認番号 684) を得て実施した。福祉健康センターの施設長へ、文書及び口頭で調査協力を依頼し同意を得た。対象者には、研究協力の有無で不利益が生じないこと、個人情報法の保護について文書及び口頭で説明し、質問紙への提出をもって同意が得られたものとした。

## 結果

### 1. 回収率および有効回答率

対象者 391 人中、129 人 (回収率 33.0%) から回答を得た。このうち回答に不備のあったものを除く 105 人 (有効回答率 81.3%) を分析対象とした。2016 年度の B 市の 1 歳 6 か月児健康診査対象者は 4,045 人<sup>17)</sup>であり、分析対象はそのうちの 2.6%であった。

### 2. 対象の属性

母親 105 人の平均年齢は 33.9±4.7 歳であった。就労ありは 62 人 (59.0%) であった。そのうち育児休業取得中の者は 6 人 (9.8%) であった。家族形態は核家族が 88 人 (85.4%) であり、現在の地域に住み始めた時期は、結婚後が 78 人 (73.6%) であった。子どもの性別は男児 46 人 (43.8%)、女児 59 人 (56.2%) であった。出生順位は、第 1 子 52 人 (49.5%)、第 2 子以降 53 人 (50.5%) であり、保育所等に入所していない者は 57 人 (54.3%) であった。

育児仲間のいる者 (以降、育児仲間あり群) は 95 人 (90.4%)、育児仲間のいない者 (以降、育児仲間なし群) は 10 名 (9.6%) であった。母親の年齢、健康診査を受けた子どもの出生順位 (以下出生順位) 等の属性

において、育児仲間の有無との関連はみられなかった (表 1)。

### 3. 育児仲間あり群の育児仲間との関係

育児仲間あり群のうち、最も交流のある育児仲間と出会ったきっかけは、出産前からの知人・友人が 55 人 (58.5%)、本児またはきょうだいの入園先が 16 人 (17.0%)、地域子育て支援事業が 13 人 (13.8%) であった。最も交流のある育児仲間との交流方法は、直接会う 60 人 (63.2%)、SNS35 人 (36.8%) であった。最も交流のある育児仲間との交流頻度は、週 1 回以上が 31 人 (32.6%)、週 1 回未満が 64 人 (67.4%) であった。最も交流のある育児仲間との関係についての満足度は、満足している・ほぼ満足している 89 人 (93.7%)、満足していない・やや満足していない 6 人 (6.3%) であった (表 2)。

### 4. 育児仲間の有無と各要因の関連

#### 1) 育児の相談相手と育児仲間に対する考え

育児の相談相手は、育児仲間あり群は夫 53 人 (55.8%)、夫以外は 40 人 (42.1%)、特にないは 2 人 (2.1%)、育児仲間なし群は夫 3 人 (30.0%)、夫以外は 6 人 (60.0%)、特にないは 1 人 (10.0%) であった。相談相手に対するサポート満足度について、やや満足していない・満足していないは、育児仲間あり群は 13 人 (15.3%)、育児仲間なし群は 2 人 (25.0%) であり、両群間に有意差はなかった。育児仲間の必要性について、必要である・やや必要であるは、育児仲間あり群は 91 人 (95.8%)、育児仲間なし群は 8 人 (80.0%) で

表 1 基本属性

		全体	育児仲間あり		育児仲間なし		p	
		n=105	(%)	n=95	(%)	n=10		(%)
<b>母親の属性</b>								
年齢(歳)	平均±標準偏差(最小-最大)	33.9±4.7	(24-45)	34.0±4.6	(24-45)	33.4±5.1	(24-41)	0.680 <sup>1)</sup>
就労の有無	就労あり (正社員・非正社員・自営業)	62	(59.0)	57	(60.0)	5	(50.0)	0.737 <sup>2)</sup>
	就労なし	43	(41.0)	38	(40.0)	5	(50.0)	
育児休業取得の有無	育児休業中である	6	(9.8)	5	(8.9)	1	(20.0)	0.410 <sup>2)</sup>
	育児休業中でない	55	(90.2)	51	(91.1)	4	(80.0)	
家族形態	核家族 (自分と夫と子どものみ・自分と子どものみ)	88	(85.4)	79	(84.9)	9	(90.0)	0.863 <sup>2)</sup>
	拡大家族 (親世代以上と同居)	15	(14.6)	14	(15.1)	1	(10.0)	
居住時期	結婚前	27	(25.5)	25	(26.3)	2	(20.0)	1.000 <sup>2)</sup>
	結婚後	78	(73.6)	70	(73.7)	8	(80.0)	
<b>子どもの属性</b>								
性別	男	46	(43.8)	42	(48.2)	4	(40.0)	1.000 <sup>2)</sup>
	女	59	(56.2)	53	(55.8)	6	(60.0)	
出生順位	第1子	52	(49.5)	45	(47.4)	7	(70.0)	0.201 <sup>2)</sup>
	第2子以降	53	(50.5)	50	(52.6)	3	(30.0)	
保育所等の入所の有無	入所している	48	(45.7)	44	(46.3)	4	(40.0)	0.751 <sup>2)</sup>
	入所していない	57	(54.3)	51	(53.7)	6	(60.0)	

1) t検定 2) Fisherの直接確率法

表 2 育児仲間あり群の育児仲間との関係

		n	(%)
<b>育児仲間あり</b>		95	
<b>最も交流のある育児仲間と出会ったきっかけ</b>	出産前からの知人・友人	55	(58.5)
※1名未記入	本児またはきょうだいの入園先	16	(17.0)
	地域子育て支援事業(こども広場・地域子育て支援センター・子育てサロン)	13	(13.8)
	母親学級・産院	5	(5.3)
	健康診査:3か月児・10か月児	2	(2.1)
	紹介	1	(1.1)
	公園	1	(1.1)
	職場復帰セミナー	1	(1.1)
<b>最も交流のある育児仲間との交流方法</b>	直接会う	60	(63.2)
	SNS(メール, Lineなど)	35	(36.8)
<b>最も交流のある育児仲間との交流頻度</b>	週に1回以上	31	(32.6)
	週1回未満	64	(67.4)
<b>最も交流のある育児仲間との関係の満足度</b>	満足している・ほぼ満足している	89	(93.7)
	満足していない・やや満足していない	6	(6.3)

※未記入を除く

表 3 育児仲間の有無による育児の相談相手と育児仲間に対する考え方の比較

項目		全体		育児仲間あり		育児仲間なし		p
		n=105	(%)	n=95	(%)	n=10	(%)	
<b>育児の相談相手</b>	夫	56	(53.3)	53	(55.8)	3	(30.0)	—
	夫以外	46	(43.8)	40	(42.1)	6	(60.0)	
	特にいない	3	(2.9)	2	(2.1)	1	(10.0)	
<b>相談相手のサポート</b>	満足している・ほぼ満足している	78	(83.9)	72	(84.7)	6	(75.0)	0.611
	やや満足していない・満足していない	15	(16.1)	13	(15.3)	2	(25.0)	
<b>育児仲間の必要の有無</b>	必要でない・あまり必要でない	6	(5.7)	4	(4.2)	2	(20.0)	0.100
	必要である・やや必要である	99	(94.3)	91	(95.8)	8	(80.0)	
<b>育児仲間にも最も期待すること</b>	情緒的サポート(共感・相談等)	80	(76.2)	76	(80.0)	4	(40.0)	0.004 **
	手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)	25	(23.8)	19	(20.0)	6	(60.0)	
<b>育児仲間づくりのために最もできそうなこと</b>	地域子育て支援事業の利用 (こども広場・地域子育て支援センター・子育てサロン)	64	(61.0)	59	(62.1)	5	(50.0)	—
	地域子育て支援事業以外 (育児サークル・母子が居そうな場所に行く)	14	(13.3)	10	(10.5)	4	(40.0)	
	特に何もしない	27	(25.7)	26	(27.4)	1	(10.0)	

Fisherの直接確率法 \* : p<0.05

あり、両群間に有意差はなかった。

育児仲間にも最も期待することとして、情緒的サポート(共感・相談等)は、育児仲間あり群は76人(80.0%)、育児仲間なし群は4人(40.0%)であり、手段的サポート(情報交換・子ども預け合う等)は、育児仲間あり群は19人(20.0%)、育児仲間なし群は6人(60.0%)であり、育児仲間なし群はあり群に比べ、手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)が有意に高かつ

た(p=0.004)。育児仲間づくりのために最もできそうなこととして、地域子育て支援事業(子ども広場・地域子育て支援センター・子育てサロン)の利用は、育児仲間あり群は59人(62.1%)、育児仲間なし群は5人(50.0%)であり、地域子育て支援事業以外(育児サークル・母子が居そうな場所に行く)は、育児仲間あり群は10人(10.5%)、育児仲間なし群は4人(40.0%)であり、特に何もしないは、育児仲間あり群は26人

表 4 育児仲間の有無による育児ストレスの比較

項目	全体	育児仲間あり	育児仲間なし	p
	n=105 平均±SD	n=95 平均±SD	n=10 平均±SD	
<b>子どもの側面</b>				
3. 私の子どもは、元気づげ私が疲れる	3.4±1.1	3.3±1.1	3.6±1.2	0.492
4. 私の子どもは、他の子どもと比べて集中力がない	2.4±1.11	2.4±1.0	2.9±1.2	0.138
5. 私の子どもは、私が喜ぶことはほとんどしない	1.4±0.6	1.4±0.6	1.4±0.7	0.830
6. 私の子どもはとても不機嫌で泣きやすいと思う	1.8±0.10	1.8±0.9	2.6±1.3	0.008 **
7. 私の子どもは、他の子どものように笑わない	1.2±0.4	1.2±0.4	1.2±0.6	0.943
8. 子どもがすることで私がとても気になることがいくつかある	2.3±1.2	2.4±1.2	2.3±1.3	0.908
9. 私の子どもは小さなことにも腹をたてやすい	2.4±1.1	2.4±1.1	2.9±1.3	0.162
10. 私の子どもは他の子どもよりも手がかかるようだ	2.0±1.1	2.0±1.1	2.2±1.2	0.556
11. 私の子どもはいつも私につきまとって離れない	2.4±1.0	2.4±1.0	2.7±1.0	0.344
<b>親の側面</b>				
1. 私は親であることを楽しんでいる ※逆転項目	1.9±0.8	1.9±0.8	2.1±1.1	0.476
2. 子どもの世話について問題が生じたとき助けやアドバイスを求める人がたくさんいる ※逆転項目	2.0±1.0	1.9±0.9	2.9±1.2	0.003 **
12. 私は物事をうまく扱えないと感じることが多い	2.5±1.1	2.5±1.1	2.5±1.5	0.943
13. 私は子どもを産んでからやりたいことがほとんどできないと感じている	2.9±1.0	2.8±1.0	3.3±1.0	0.175
14. いつも子どもが何か悪いことをすると私のあやまちだと感じてしまう	2.1±0.9	2.1±0.8	2.8±1.0	0.012 *
15. 子どもを産んでから夫は期待したほど援助やサポートをしてくれない	2.3±1.2	2.3±1.2	3.3±1.1	0.009 **
16. 子どもを産んだことにより夫との問題が思ったより多く生じている	2.4±1.3	2.2±1.2	3.8±1.2	0.000 ***
17. 私は孤独で友達がいないと感じている	1.8±0.9	1.8±0.8	2.7±1.2	0.001 **
18. この6ヶ月間私はいつもより病気がちで痛みを感じるが多かった	1.7±1.0	1.6±1.0	2.2±1.4	0.110
19. 私は以前のように物事を楽しめない	1.8±1.0	1.7±0.9	2.6±1.2	0.007
合計	40.7±10.9	40.1±9.3	50.0±13.9	0.003 **

t検定 \*\*: $p < 0.01$  \*\*\*: $p < 0.001$ 

表 5 育児仲間の有無による対人態度の比較

	全体	育児仲間あり	育児仲間なし	p
	n=105 平均±SD	n=95 平均±SD	n=10 平均±SD	
<b>内的作業モデル</b>				
安定型	20.4±5.4	20.9±5.0	15.5±6.7	0.004 **
アンビバレント型	17.4±5.1	17.2±5.0	18.3±7.0	0.547
回避型	16.7±5.0	16.5±5.0	18.7±5.0	0.190

t検定 \*\*: $p < 0.01$ 

(27.4%), 育児仲間なし群は 1 人 (10.0%) であった (表 3)。

### 3) 育児ストレスとの関連

育児ストレス尺度の合計得点は、育児仲間あり群が 40.1±9.3, 育児仲間なし群が 50.0±13.9 であり、育児仲間なし群はあり群に比べ、高かった ( $p=0.003$ )。育児ストレス尺度の下位項目の親の側面のうち育児仲間の有無に有意差がみられた項目は、「子どもを産んだことにより夫との問題が思ったより多く生じている」( $p = 0.000$ )、「私は孤独で友達がいないと感じている」( $p=0.001$ )、「子ども世話について問題が生じたとき助けやアドバイスを求める人がたくさんいる※逆転項目」( $p=0.003$ )、「子どもを産んでから夫は期待したほど援助やサポートをしてくれない」( $p=0.009$ )、「いつも子どもが何か悪いことをすると私のあやまちだと感じてしまう」( $p=0.012$ ) であった (表 4)。

### 4) 対人態度との関連

内的作業モデル (安定型) の得点は、育児仲間あり群が 20.9±5.0, 育児仲間なし群が 15.5±6.7 であり、育児仲間なし群はあり群に比べ、低かった ( $p = 0.004$ )。

内的作業モデル (アンビバレント型) の得点は、育児仲間あり群が 17.2±5.0, 育児仲間なし群が 18.3±7.0 であり、両群間に差はみられなかった。内的作業モデル (回避型) の得点は、育児仲間あり群が 16.5±5.0, 育児仲間なし群が 18.7±5.0 であり、両群間に差はみられなかった (表 5)。

### 5) 育児仲間の有無に関連する要因

育児仲間の有無と関連が認められたのは、育児仲間にも最も期待すること ( $p = 0.015$ , オッズ比 5.443), 内的作業モデル (安定型) ( $p = 0.007$ , オッズ比 0.831) であった (表 6)。

## 考察

### 1. 対象者の特徴

B 市の 1 歳 6 か月児の母親は平均年齢が 33.9 歳であり (表 1), 都市部の 1 歳 6 か月児の母親の平均年齢の 33.6 歳<sup>7)</sup> と同様であった。就労している者は 59.0% であり (表 1), 全国の 1 歳児を末子に持つ母親の就労者の 48.1%<sup>18)</sup> よりも高かった。このことは、B 市のある A 県の女性の有業率が 52.2%<sup>19)</sup> であり、全国

表 6 育児仲間の有無に関連する要因

	育児仲間あり		育児仲間なし		偏回帰係数	95%信頼区間 オッズ比(下限-上限)	p
	n	(%)	n	(%)			
	平均±SD		平均±SD				
<b>育児仲間に最も期待すること</b>							
0:情緒的サポート(共感・相談等)	76	(80.0)	4	(40.0)	1.694	5.443(1.346-22.01)	0.015*
1:手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)	19	(20.0)	6	(60.0)			
<b>内的作業モデル(安定型)</b>	20.9±5.02		15.55±6.69		-0.185	0.831(0.72-0.959)	0.007**

二項ロジスティック回帰分析(ステップワイズ法) \*:p<0.05 \*\*:p<0.01

表中以外で投入した変数:育児仲間づくりのために最もできそうなこと、育児ストレス尺度得点、内的作業モデル(回避型・アンビバレント型)

平均の48.2%<sup>19)</sup>よりも高いという地域性を反映していると考えられる。

育児仲間がいない者の割合は9.6%であった(表1)。1歳6か月児の母親の育児仲間の有無に関する先行研究はなく比較はできないが、B市で3か月児の母親を対象に行った育児仲間の有無の調査<sup>8)</sup>では、育児仲間がいない者の割合は10.1%であり、1歳6か月児の母親と同様の割合であった。馬場ら<sup>6)</sup>が都市部で行った3か月児の母親の育児仲間がいない者の割合は20.9%<sup>5)</sup>であり、それと比較するとB市の3か月児の母親と1歳6か月児の母親のどちらも約10%低かった。都市部の3か月児の母親を対象とした調査に比べ、B市の3か月児および1歳6か月児を持つ母親では育児仲間がいない者の割合が低かった理由として、平成24年度の調査では、都市部の転入率が10.4%<sup>19)</sup>であるのに対し、B市のあるA県の転入率は4%以上6%未満<sup>18)</sup>と低いことから、B市では住み慣れた地域で暮らす人の割合が多く、従来からの知人や友人との関係が出産後も継続し、育児仲間になることが考えられる。また、就労している母親の割合は59.0%であり、全国の1歳児を末子に持つ母親の就労者の割合の48.1%<sup>18)</sup>より高かった。このことから、職場を通じた知人や友人との関係から、出産後は育児仲間になることも考えられる。

1歳6か月児を持つ母親の約1割は育児仲間がおらず、そのうちの8割は育児仲間を求めていることから、育児仲間づくりの支援は必要であると考えられる。

## 2. 育児仲間づくりの支援

育児仲間の有無に関連していた項目は、育児仲間の最も期待すること(情緒的サポート/手段的サポート)、内的作業モデル(安定型)の得点であった(表6)。育児仲間がいない者は育児仲間がいる者に比べ、育児仲間に手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)を期待する割合が高く、また内的作業モデルの安定型の得点が低い傾向が見られた。育児仲間がいない者は、内的作業モデル(安定型)の特性である「他者は自分に対して応答的で、自己に関しては援助される

価値を有する存在である」という表象<sup>13)</sup>が低いことから他者との関係に苦手意識を持つ傾向にあると考えられたため、育児仲間に対しても情緒的サポート(共感・相談等)より手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)を期待する結果につながる可能性があると考えられる。また、育児仲間がいない者は育児仲間に手段的サポート(情報交換・子どもを預け合う等)を期待しながらも、それが得られていない可能性があることも示唆された。

育児仲間の有無と対人態度については、3か月児の母親を対象に行った調査<sup>8)</sup>では関連がみられなかった。しかし、今回の1歳6か月児を持つ母親では、育児仲間がいない者は対人態度の中でも(安定性)の得点が低い傾向が見られた。その理由として、子どもの発達状況の違いの影響が考えられる。1歳6か月児では歩行が確立することから、母親の活動範囲も広がり、母親同士の出会いが増えることが予想される。しかし、育児仲間がいない者は他者との関係に苦手意識を持つ対人態度の特徴が影響し、育児仲間をつくりにくい傾向があることが考えられる。

育児仲間づくりのために最もできそうなことについて、育児仲間の有無に差は見られなかった。しかし、本調査では検定可能なデータ数には至らなかったが、育児仲間がいない者はいる者に比べ、地域子育て支援拠点事業の利用と回答した者が少ない傾向がみられた。地域子育て支援拠点事業は、公共施設や保育所等の身近な場所で乳幼児およびその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談・情報の提供・助言、その他の援助を行うことを目的とする。また、地域子育て支援拠点の設置には、育児仲間づくりの場として気軽に活用してほしいというねらいがある<sup>3)</sup>。育児仲間がいない者は、対人態度の特徴から他者との関係に苦手意識をもつことが考えられることから、見知らぬ母親が参加する地域子育て支援の活用には戸惑いがあることが予想される。また、地域子育て支援を活用しても育児仲間がつくりにくいことが予想さ

れる。

成田ら<sup>21)</sup>は、母親達の人間関係作り支援のために、出産前に構成的グループ・エンカウンターと言われる、心と心のふれあいを体験するための課題を行う集団指導を行った。仲間作りの支援を希望している者は、構成的グループ・エンカウンター実施前81%、実施後96%と増加し、孤独感が強く育児不安が高い母親が特に仲間作り支援を希望していることを報告している。このことから、地域子育て支援では、母親同士の交流が必然的に図れるような集団遊びやグループ遊びを行ったり、母親だけのグループ活動の機会を設けるなど、母親同士の交流が促進されるような工夫が必要であると考える。また、集団活動に積極的に参加できない母親が抵抗なく参加できるように、少人数によるグループ・ケア<sup>22)</sup>を企画したり、必要に応じては個別に支援することも望ましいと考える。

育児仲間がいる者は、最も交流のある育児仲間と出会ったきっかけについて、出産前からの知人・友人である者の割合が58.5%であった(表2)。このことから、育児仲間づくりの支援の時期は、出産後のみならず妊娠期のうちから取り組む必要があると考える。

本研究の限界は、対象者が一つの市内に居住する母親に限られていること、回収率が33.0%であること、育児仲間の有無の2群のうち育児仲間なし群のサンプルサイズが小さいことから、育児仲間の有無の関連要因を断定することまでは言えない。また、横断的研究のため子どもの成長・発達の変化に伴う母親の育児仲間の有無の関連要因の変化までを言及することはできない。したがって、地域を拡大しサンプルサイズを大きくして本結果を検証するとともに、縦断的な調査を行い、子どもの年齢の違いに伴う母親の育児仲間の

有無の要因の変化について、分析する必要がある。

## 結論

1 歳 6 か月児の母親の育児仲間の有無とその要因を検討することを目的に、B市の乳幼児健診を受診する母親に無記名自記式質問紙調査を行い、以下の結果を得た。

- 1 歳 6 か月児を持つ母親のうち育児仲間なしの者は約1割いた。そのうちの8割は、育児仲間が「必要である・やや必要である」と答えていたことから、育児仲間づくりの支援は必要である。
- 育児仲間ありの者の最も交流のある育児仲間は、出産前からの知人・友人が約6割であったことから、育児仲間づくりのための支援は出産前から行うことが重要である。
- 最も交流のある育児仲間との出会ったきっかけは、地域子育て支援事業の利用が約1割であったことから、育児仲間づくりのための地域子育て支援事業の有効な活用を検討する必要がある。
- 育児仲間の有無に関連する要因は、対人態度を示す内的作業モデル(安定型)と、育児仲間に最も期待すること(手段的支持/情緒的支持)であった。このことから、育児仲間がいない者は育児仲間手段的支持(情報交換・子どもを預け合う等)を期待しながらも他者との関係に苦手意識があることから、母親同士の交流が促進されるような育児仲間づくりの支援が必要である。

本研究は金沢大学大学院医薬保健学総合研究科修士論文の一部に加筆・修正を加えたものであり、第77回日本公衆衛生学会総会で発表したものである。利益相反に関する開示事項はない。

## 文献

- 1) 厚生労働省：厚生労働白書社会保障の検証と展望 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/12/> 第2部第1章安心して子どもを産み育てることができる環境整備, (2019年10月10日).
- 2) 厚生労働省：つどいの広場事業実施要綱, <http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/shiryu/syakaifukushi/921.pdf>, 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知, 2002, (2019年10月10日).
- 3) 厚生労働省：地域子育て支援拠点事業(平成19年度より), 2007. [http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1226-13l\\_0002.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1226-13l_0002.pdf), (2019年10月10日).
- 4) 厚生労働省：「地域子育て支援拠点事業の実施について」の一部改正について, 2015. <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/h270717/t10.pdf>, (2019年10月10日).
- 5) 厚生労働省：子育て世代包括支援センター業務ガイドライン, 2017. <https://www.mhlw.go.jp/file/06Seisakujouhou.../kosodatesedaigaidorain.pdf>, (2019年10月10日).
- 6) 馬場千恵, 村山洋史, 田口敦子, 他 (2013): 乳幼児を持つ母親の孤独感と社会との関連について, 家族や友達とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート, 日本公衆衛生雑誌 60, 727-737.
- 7) 佐藤美樹, 田高悦子, 有本梓 (2014): 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因, 乳幼児の年齢集団別の検討, 日本公衆衛生雑誌, 61, 121-129.
- 8) 瀧野千歳, 田口(袴田)理恵, 河原智江, 他 (2012): 第一子の育児休業中の母親が人とのつながりの中で求める感情面と情報面のサポート, *Yokohama Journal of Nursing* 5(1), 66-70.
- 9) 宮野幸子, 表志津子, 岡本 理恵, 他 (2018): 3か月児を持つ母親の育児仲間の実態と育児仲間の有無に関連する要因, 北陸公衆衛生学会誌 45 (1), 1-9.
- 10) 中山満子 (201): ママ友という対人関係ー意外と大変, ママ友とのお付き合いー, 地域保健, 42, 52-55.
- 11) 荒木暁子, 兼松百合子, 横沢せい子, 他 (2005): 育児ストレスショートフォームの開発に関する研究, 小児保健研究 64 (3): 408-416.
- 12) 奈良間美保, 兼松百合子, 荒木暁子, 他 (1999): 日本版 Parenting Stress Index(PSI) の信頼性・妥当性の検討, 小児保健研究 58(5), 610-616.
- 13) 戸田弘二 (1988): 内的作業モデル尺度, 心理測定尺度集Ⅱ, サイエンス社, 東京.
- 14) 詫摩武俊, 戸田弘二 (1988): 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 15) 戸田弘二 (1989): 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル (2): 対人認識場面における情報処理の違い, 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 198.
- 16) 戸田弘二 (1990): 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連, 北海道教育大学紀要 (第1部C), 41, 1, 91-100.
- 17) 金沢市: 金沢市公式ホームページ <https://www4.city.kanazawa.lg.jp/23030/nenpo/excel28/H28excel.html>, 平成28年衛生年報, (2019年10月10日).
- 18) 厚生労働省: 平成26年国民生活基礎調査の概況, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/>, 児童のいる世帯の状況, (2019年10月10日).
- 19) 総務省: 平成24年就業構造基本調査結果の概要, <http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012/pdf/kgaiyou.Pdf>, Ⅲ都道府県の実業構造, (2019年10月10日).
- 20) 総務省統計局: グラフで見るわが国の人口・世帯, <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/gurahude.htm>, 平成22年国勢調査解説シリーズNo.1, (2019年10月10日).
- 21) 成田秀子, 小川深雪, 福士美香子, 他 (2003): 母親達のリレーション作りに用いた構成的グループ・エンカウンターの効果, 母性看護, 34 (17), 49-51.
- 22) 松野郷有実子, 永井真知子, 相田一郎, 他, (2004): 育児不安を抱えた母親に対するグループ・ケアの試み, 小児保健研究 63 (4), 453-458.

## The status of parenting acquaintances and factors related to the presence or absence of parenting acquaintances among mothers with 18-month-old children.

Sachiko Miyano, Tomoko Ishiwata<sup>1)</sup>, Shizuko Omote<sup>2)</sup>, Rie Okamoto<sup>2)</sup>,  
Akie Nakada(Ichimori)<sup>2)</sup>, Yutaro Takahashi<sup>3)</sup>, Yuko Yamada<sup>4)</sup>

### Abstract

**Objective:** To elucidate the present situation regarding parenting acquaintances and the factors related to the presence or absence of parenting acquaintances among mothers with 18-month-old children.

**Subjects and Methods:** An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted with mothers in A prefecture, B city, who had just completed their child's 18-month health checkup. Questionnaire items covered basic attributes, child-rearing conditions, child-rearing stress, interpersonal behaviors (internal working model), and the presence or absence of parenting acquaintances. The factors related to the presence or absence of parenting acquaintances were examined by logistic regression analysis.

**Results:** Of the 105 subjects, 10 (9.6%) lacked parenting acquaintances (the "don't have" group). The average age of the subjects was 33.4 years, 70.0% were raising their first child, and 80.0% felt that it was necessary to have parenting acquaintances. Sixty percent of the "don't have" group responded that what they hoped for most from parenting acquaintances was instrumental value, which was significantly higher than in the "have" group at 20.0% ( $p < 0.01$ ). The "don't have" group scored significantly higher on the child-rearing stress scale ( $p < 0.01$ ) and significantly lower in the internal working model (stable type) ( $p < 0.05$ ). The factors related to the presence/absence of parenting acquaintances were the benefit most hoped for from parenting acquaintances (instrumental value/emotional value) ( $p = 0.015$ , odds ratio [OR] 5.443) and the internal working model (stable type) ( $p = 0.007$ , OR 0.831).

**Discussion and Conclusion:** At 18 months old, children become capable of walking and opportunities to go out increase, so it is expected that opportunities to meet other parents will also increase. However, approximately 10% of parents lack parenting acquaintances, and although they can anticipate the instrumental value of such acquaintances, their difficulty in building relationships with others suggests that parental acquaintance-building support is needed to promote exchanges among mothers.